The Japan Society of Educational Sociology



# 高度成長期以後の日本人の教育歴とライフコース

岩井 八郎（大阪大学）

高度成長期以後の日本社会の転換点として、1970年代中頃、いわゆる石油ショック期を取り上げることに関して、すでにかなりの合意があるように思う。石油ショックに端を発する経済成長の鈍化、男子正規雇用者を抑える企業の雇用調整、サービス産業の拡大、既婚女性の労働市場への再参入、国民性調査にみられる一般的な価値意識の変化など、社会指標の趨勢をみるならば、この時期を境にした何らかの変化を確認することができる。また学校教育に関しても、すでに1970年代中頃に高校教育が普遍化しており、いくつかの改革があるものの、この時期よりわが国の教育機会の基本的な構造が固定化されたと考えてよいだろう。一方では、石油ショック期以後の産業・職業構造の変化があり、他方では教育機会の固定化がある。本報告は、1985年SSM調査を基に、学歴別職業経歴の時代的変化を追求することによって、高度成長期から石油ショック期を経て今日までの日本社会の変化・学歴・職業経歴の三者の関係について検討することを目的としている。

周知のように、SSM調査は職業経歴データとして、初職就業時点から調査時点までの年齢に切れ目のない個人の経歴に関する情報を収集している。本報告では、このデータを再構成して、個人の年齢と時代の年次とを対応させ、そこにあらわれる職業的地位の推移を出生コーホート間で比較する。これは、個人の人生における役割や地位の移行を、その位置する時代的な文脈の中で理解しようとするライフコース研究の主たる研究方法である。ライフコースという概念は、就学、卒業、就職、退職といった人生の出来事の年齢に伴う推移をたどるという常識的な研究の枠組みである。しかし出生年の異なる集団の比較を通して、地位や役割の移行に対する時代の影響を明らかにしうる点に、その研究枠組みの独自性があるといえよう。

すでにSSM調査に基づくライフコース分析の成果として、二つの研究結果を報告してきた。まず女性のライフコースに関する分析では、1970年代中頃以後の時代の影響として、既婚女性のパートタイム雇用者の急増という就業形態の変化とライフコースの分岐点の早期化があげられる。高度成長期前半に高校普通科を卒業した女性では、ライフステージに対応して30代後半よりパートタイマーが増加する。一方戦後出生で高度成長期後半以後に学校教育を修了した女性の場合、どの学歴層でも、20代後半にライフコースの分岐点をむかえている（岩井 1988, 1989）。このような女性のライフコースの変化は、勿論女性の社会的地位に関する文化的価値の変化に支援されているが、石油ショック期以後の企業の雇用政策の変化やサービス経済化の進行の帰結であることは、明瞭であろう。

石油ショック期以後の職業構造の変化は、男性のライフコースの分析結果にもあらわれている。学歴別の従業先間移動に関するコーホート間の比較分析は、1946-50年出生の高校卒を境とする変化を示している（岩井 1988）。それ以前の高校卒では、30代までかなり頻繁な従業先の移動がみられ、大企業への移動も存在する。しかし1946-50年出生の高校卒では、20代後半からの従業先の移動が停滞し、



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

それ以後のコーホートでは、従業先間移動は中小企業に限定されるのである。1946-50年出生の高校卒にとって、20代後半は1970年代中頃以降にあたる。つまり移動の停滞として、時代の影響があらわれており、高校教育の普遍化したそれ以後の高校卒では、職業構造における高卒カテゴリーの下降が示唆されているのである。

本報告では、前述の男性のライフコースに関する分析をさらに進め、職業的地位の指標について多面的な検討を試みたい。その分析結果の一部として、正規雇用者の企業規模と職業の内容を組み合せて、最初の従業先に留まる比率を算出した三つのグラフを紹介しておく。三つのコーホートの高校卒を比較して、1936－40年出生では、大企業と中小企業の間で従業先の停留に顕著な違いが見い出せる。しかし1946-50年出生では、4つのカテゴリーに共通して、25才以後の移行が停滞しているのである。そして、1956-60年出生では、中小企業のブルーカラー層の比率が増加し、そのカテゴリーにおいてのみ、明瞭な最初の従業先からの移行がみられるのである。つまり1946-50年出生の高校卒は、25才以後かなり一様に、1970年代中頃以降の時代の影響を受けていることが示唆される。そしてこのコーホートを分岐点として、高校卒の職業構造における位置が変化したと考えられるのである。

以上の分析結果に、中学卒および大学卒の分析結果をも加え、日本社会の変化・学歴・職業経歴の三者の関係を学会報告において検討したい。

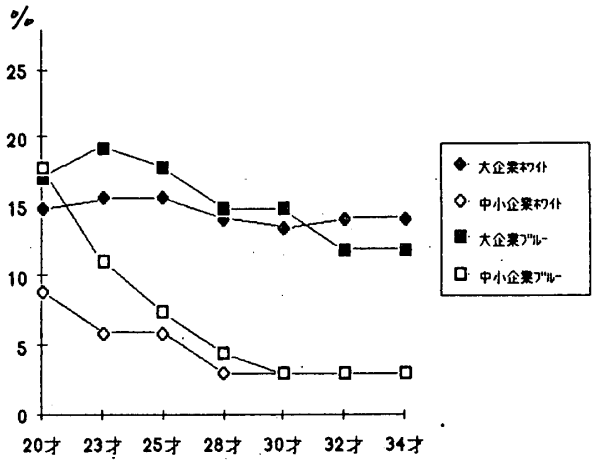
（文献）


岩井八郎（1988）「女性の教育経歴とライフコース」SSM調査報告書、第8巻

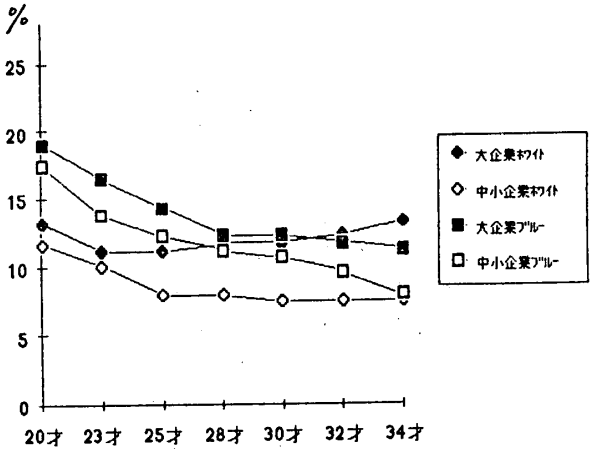
〃　（1988）「教育の拡大とライフコースの変化」1988年度教社学会報告

〃　（1989）「社会変動・教育・女性のライフコース」近刊予定『現代日本の階層構造』第3巻

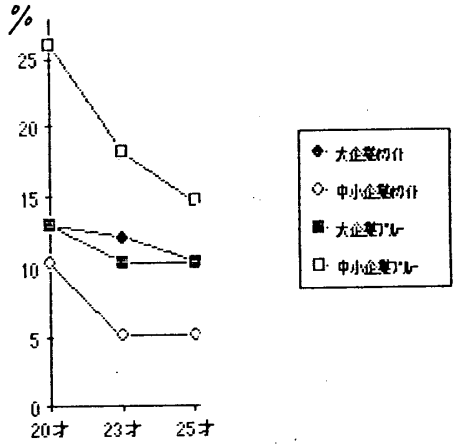

1936-40年出生高校卒の職業経歴（最初の従業先）




1946-50年出生高校卒の職業経歴(最初の従業先)




1956-60年出生高校卒の職業経歴
（最初の従業先）






NII-Electronic Library Service